



昭和三十一年三月

矢野禾積博士  
還曆記念論文集

# 近代文藝の研究

株式会社 北星堂書店發行

矢野木實博士  
還暦記念論文集

近代文藝の研究

定価八五〇円

昭和卅一年三月十一日發行

©

編輯者 東京都立大学英文研究室内  
矢野博士還暦記念刊行會

發行所 東京都千代田区神田錦町三ノ十二  
株式会社北星堂書店

印刷所 東京都千代田区神田錦町三ノ十四  
大文堂印刷株式会社

目

次

|                            |               |
|----------------------------|---------------|
| 空白の美しさ……………                | 内藤濯……………(一)   |
| 文藝史の時代區分……………              | 橘忠衛……………(二)   |
| 戯曲論……………                   | 番匠谷英一……………(元) |
| 日本文學の叙事性について……………          | 齋藤清衛……………(元)  |
| 能の懸詞冠辭序詞緣語としぐさとの聯關に就て…………… | 日夏耿之介……………(五) |
| 象徵文藝雜考……………                | 石丸久……………(五)   |
| ——近代日本象徵詩研究序說の一齣——         |               |
| 近代の幸福觀……………                | 雜賀忠義……………(七)  |
| 若松賤子と英米文學……………             | 中村忠行……………(七)  |
| 未完成の批評家、福島靜齋……………          | 柳田泉……………(三)   |
| 「夏草」論……………                 | 笹淵友一……………(二五) |

藤村文學の批評的性格……………新井 寛…(一九)

——フランス時代の藤村と栗本鋤雲——

「公孫樹下にたちて」考……………松 村 緑…(三七)

伊良子清白の浪漫主義と西洋文學……………森 亮…(三五)

泉鏡花とオスカア・ワイルド……………村 松 定 孝…(四七)

——「天守物語」と「サロメ」との影響關係に就いての考察——

『珊瑚集』の背景……………安 田 保 雄…(六五)

三木露風の幻想的象徴……………岡 崎 義 惠…(六七)

「佐藤春夫」覚え書……………島 田 謹 二…(四九)

萩原朔太郎試論……………矢 本 貞 幹…(三七)

——詩の構成について——

厨 川 白 村……………深 瀬 基 寛…(五)

|                   |              |
|-------------------|--------------|
| 雑誌『新科學的』について      | 太田三郎……(三五九)  |
| 日本に於けるエマスン        | 山宮允……(三七五)   |
| ジャック・ロンドンと日本      | 木村毅……(三八三)   |
| バイロンとゲーテとの關係      | 益田道三……(四〇七)  |
| リルケとエリザベス・ブラウニング  | 富士川英郎……(四二九) |
| 詞人納蘭性徳について        | 中田勇次郎……(四四九) |
| コールリツヂの肖像畫        | 岡本昌夫……(四六七)  |
| 晩年のグレゴリー夫人        | 山本修二……(四八〇)  |
| タブーからの解放          | 西村孝次……(四九七)  |
| ——D・H・ロレンスの批評精神—— |              |
| 性表現と敬意表現          | 池田義一郎……(五〇九) |

|                                                                 |            |       |
|-----------------------------------------------------------------|------------|-------|
| BARNADINE 讃                                                     | 堀 大 司      | (五九)  |
| NATURALISTIC AND ANTI-NATURALISTIC<br>ELEMENTS IN STEPHEN CRANE | NAOZO UENO | (五六三) |
| Stephen Crane の小説について                                           | 林 信 行      | (五六三) |
| 「ギリシア古甕の賦」の構成                                                   | 小日向 恒 夫    | (五九)  |
| イエツの詩について                                                       | 加 納 秀 夫    | (六三)  |
| E・M・フォースターの古さと新しさ<br>——“Where Angels Fear to Tread”をめぐって——      | 佐 伯 彰 一    | (六三九) |
| 英國の群像型小説                                                        | 相 良 次 郎    | (六四五) |
| 矢野禾積博士略年譜                                                       |            | (六六三) |
| 矢野禾積博士著作目録                                                      |            | (六九〇) |
| あと が き                                                          |            | (七三三) |

# 空白の美しさ

内 藤 濯

「詩には仄めかしのみがあるべきだと思ふ。・・物の全體をとらへて、それを言葉にする意味の詩からは、幽玄の趣が消えてなくなる。：：何か一つの對象をこれだとはつきり言ひ切ることは、詩から受ける楽しさの四分の三をなくすことになる。詩から受ける楽しさとは、詩人の歌ふところが、すこしづつ仄かながら感じられて行く嬉しさをいふ。したがつて、詩の對象を暗示することこそ、詩の夢なのである。：」

フランスの象徴詩は、マラルメのこの主張をめぐつて、由來「明るさ」を傳統とするフランス文學に新しい血液をつぎこんだ。文字と文字、言葉と言葉とのあひだに寸分のすきをも残さぬ細かい感覺のあざやかさ、これがフランス詩の傳統であつたのなら、いふところの象徴詩は、敢然この傳統を破つて、詩を書く人と詩を読む人とが、文字と文字、言葉と言葉とのあひだに残されてゐる空白で呼吸を合はす美しさをねらふことになつたのである。手取ばやくいへば、日本文學の特質である餘韻餘情、それこそはフランス象徴詩のねらつたところであるやうにも思はれるのである。

ヴェルレーヌはその「詩術」と題する詩の中で、「ほのかなるものと鮮やかなる物との結び合ふ灰色の歌に若くものなし……われらの求むるところは陰影なり。色にあらずして、ただ陰影のみ……いやさらに音楽を、つねに音楽を……」といつて、一方では、何もかも言ひつくさうとする人の言葉があまりにも餘韻に乏しいことを憎み、また一方では、音楽のあたへるほのかな印象に詩の重點を置いた。よし表現はちがつてゐても、彼のねらつたところは、マラルメの場合と變りはない。彼の詩においては、物の動きの多様な美しさが、物の姿の一やうな鮮やかさに代つたのである。

君がこころはいと美しき夕けしき

景色いろどり練りあるく假面舞踏のひとむれは、

玉琴いだき掻き鳴らし舞ひをどり

凝りに凝りたる装束のかげに悲しき色見する。

これは畫家ワットーの好んでゑがいた十八世紀情景である。酒宴と舞踊のゆふべ、咲き切つた花のくづれをおもはせる嬌態のかすかず、それにつづく倦怠と憂愁、それらのワットー情景が、ここでは色とひびきとの美しい渦巻となつて詩句を織り出したのである。眼に映るところを逐一手順よくならべる氣持になれば、この風景はどこまでも畫家ワットーの風景であつて、空間的な美しさで彩られたものになるほかはないであらう。しかるにヴェルレー

ヌは、この場合、十八世紀情景をゑがいたワットーの畫筆の美しさに引きつけられたのではなくて、むしろその繪ごころの流れを詩の對象とした。したがつて、ここでは印象がとらへられてゐるのでなしに追はれてゐるのである。一つの印象が浮びあがると、それはまもなく流れ去つてつぎの印象がそれにつづくのである。印象がならぶのでなしにつぎつぎに追ひつ追はれつするのである。風景とはいつても、これは客觀的なただの風景ではない。十八世紀情景を前にした畫家ワットーの心理の流れとヴェルレーヌのそれとが一つに結んだ風景である。いはば心の陰影でぼかされた風景である。

フランス象徵詩のもつ餘韻餘情が、多くの場合、ヴェルレーヌのこの詩に採り入れられてゐるたぐひの陰影から感じられることはたしかである。マラルメの詩にいたつては、ほのめかしのみが詩だといふ主張から發してゐるだけに、陰影のうへに陰影が重なつてゐて、神韻縹渺の美しさと魔物にとりつかれた惱ましさととのけぢめがつかなくなることも一再ではない。事がさうなると、彼のいふ「詩からうける樂しさ」はむしろ苦しさとなつて、餘韻餘情もその度が過ぎるとかへつて感じられなくなる恐れさへもあるのである。

正岡子規の「隨問隨答」によると、俳人坂本四方太はかつて何かの折に「印象が明瞭でなければ餘情がない。風韻がない。餘情は明瞭の度に正比例する」といつた。これはマラルメあたりの主張とはまつたく逆の考へかたで、四方太のねらつた餘情とは、主觀的な印象の仄かさが生む餘情ではなくて、ヴェルレーヌあたりのねらつた對象の時間的な動きに絡まる言外の美しさを感じたうへのことではなかつたかと思ふ。はじめから對象をぼかして感ずるところに餘情があるなら、對象の動きを鮮かな感覺で追つて行くところにも、依然餘情の感じられる面がある。一

つは謂はば刷筆畫のもつふくみであり、もう一つは、樂音の流れを追うて行く刹那それぞれの残す空白的な印象である。樂音の流れは咲き揃つた花を思はせるほど鮮やかなものであつても、その鮮やかさは時間の波に乗つて動くがゆゑに餘韻を残すと私は言ひたいのである。

かやうな考へを頭の中に置いてフランス象徴詩人の群を見わたすと、私の眼さきには、「沈黙と寂寥の詩人」として名たかいアンリ・ド・レニエの姿態が浮んでくる。

朝戸出のわが行くは町のそとなり。

歩道を行けば足音の高鳴りて、

若やける日のひかり古びたる瓦を暖め、

家々の狭き庭にはリラの花咲きてあり。

詩人の朝の散歩である。ふたん着のまま家を出て、郊外の爽やかな風に吹かれるまでの時間の経過が、まつ簡素なはじめの一句にこめられてゐる。われ／＼のこの一句からうける印象は、まさに明るさそのものであつて、マラルメのいふ「詩の夢」のほのかさにも縁がなければ、ヴェルレーヌのいふ「灰色の歌」を思はせる手がかりもない。朝の空氣そのままな清潔さが、すらすらと透明なリズムを刻んでゐるきりである。ところで、事がかやうに淡々と表現されてみると、讀む人の心の中には、もつと何かを言つてもらひたい氣持も起つてくるし、あるひはまた

町をはなれた途端、俄かに風の清らかさを感じたとか、今更ながら空の青さに心を打たれたとかいふほどのことを  
おこがましくとも詩人に代つて言つてみたい氣持にもなつてくる。書く人と讀む人とが言葉の空白で呼吸を合はす  
とはまさにこのことで、何か一つの事柄を前後左右うらおもてから言ひつくさうとする人の心は餘情のふくみに無  
縁であるが、事柄の急所だけをとらへて、他を惜しみなく切り捨てる人の言葉には依然餘情の美しさが絡むと私は  
強く言ひたい。印象が鮮明であればあるほど餘情が加はるといふことを詩について言ふとすれば、それはかやうな  
場合にしつくり當てはまることなのであらう。

リラの花の咲いてゐる小庭を左右に眺めながら歩いて行くと、道はやがて坂になる。それを登りつめると、生れ  
た町の朝けしきが詩人レニエの眼のまへに展けてくる。

ややありて坂道をのぼりつめ見さくれば、

靜かに、小さく、乏しげに、寄るべなく、うづくまり、

わが生ひたちし町の屋なみは親しげに、

坂の麓にひさかたの光りを浴びて伏してあるのとやかさ。

見よ、横長にひろがる町を行く河は、

ものの二たび淀みつつ二つの橋をくぐりぬけ、

散歩道路に立ちつづく木々は古りたり、家々を

見下ろしてそりたつ鐘撞堂の築石もろともに。

依然鮮明な印象がつつく。ただしここでは、物の姿の美しさが主調となつてゐて、二度よどみ二度橋の下を流れて行く河水の動きをほかにすれば、物の動きの美しさが押しつけられてゐることに物足りなさの感じられぬこともない。しかし、河と橋、散歩道路から鐘樓へと、風景の中心がまちがひなく捉へられて、印象の焦點だけが微塵も感じられぬ美しさは、レニエをレニエたらしめる所以であらう。視野も散亂させずに然るべき一點に集中すること、これはフランス象徴詩の一つのねらひである。

この詩作態度がほとんど餘すところなく表現された見本ともなるもので、レニエには「眞晝」と題する短詩がある。

眞晝なり……かの白き道は毎にむかひて續けり。

「朝の散歩」と同じあつさりした言葉の中に餘情をこめた手法が詩句を起してゐる。ほのかさなどの入り込む餘地のまつたくない風景である。

あかるき日の光り窓より入りきたりて、

涼しさなほ残る部屋の床板に、

かへり來し人々の足裏につけてもたらせる

きらきらと乾きたる砂屑を照らしてあり。

空氣は日曜と夏のかをりに染みて靜かなり。

ほとぼれる布地のにほひ、松脂のにほひ、

と見れば、枝にかかれる松毬の影ひとつ、

粗布あらふの日蔽ひかげにゑがかれたり。

夏の日曜の光りと色とかをりとを風景の隅々に集中させた詩人の感覺は、ここで一轉して内界に同けられる。睡魔が午さがりの熱氣に手を引かれて靜かにやんわりと忍び寄るのである。

靜けさは杳かなる世の事と思はるほどの靜けさ、

かくてある身も靜けさに心遠く折からを、

「物憂さ」はいとやをらからたをゆすり、

疲れしはての憩ひしみじみ味はふけはひ、

うつくしきまなこ伏せ臉を合はせ、

柳細工の脇掛椅子にながながと横たはり、

人目なく真裸のおのが姿に笑みかくる。

外界の明るさが内界にも射し込んで、うつらうつらそこに結ばれる夢もまた、微笑の美しさを思はせるほど明るい。しかもその明るさのうちには、匂はしいほどに弛みをもつた心の風景が、肉づきの豊かな身體のゆるやかな揺れとなり、しづかに合はされる瞼の細かい動きとなつてつづく。まさに弱音をかけた絃樂器の奏でるアダジオの音楽である。

レニエの詩には、印象を繪畫風にならべる面と、それを音楽的に追つて行く面とがある。彼がフランス象徴詩人中の異彩として見られるのはこの點で、彼の詩のもつ餘韻餘情は、それが一途に「いやさらに音楽を、つねに音楽」といふヴェルレーヌ振りに執するところにあるのではない。空間感覺が詩の素地となつてゐて、そこへ時間感覺が時としてはまるで思ひだしたやうにからむ風情、それが彼の詩を美しいものにする所以である。時間感覺で空間感覺の結晶化を防ぐことに重點を置いた詩、それこそはレニエの詩であると言へぬこともないであらう。

空白の美しさといひ、餘韻餘情といふことその事が、ほのかな印象を意味することは疑はれない。ところでほのかな印象とは、ほのかな表現からは際だつて感じられずに、一方に表現の明るさと鮮かさがあつてこそはじめて強く感じられるであらう。これがレニエの詩についての私の結論であるが、かう思ふにつけても、私の心の中には、歌僧良寛の辭世の句が浮んでくる。

裏を見せ表を見せて散るもみぢ

あくまで鮮やかな表現である。それでゐて、表裏のない駆引のない生活を成し遂げた人の静かな心の風景が、ここではまがふ方もない餘韻餘情となつて強くわれ／＼の心を打つのである。かやうな何をもとにして考へると、マラルメのいふ「詩のほのめかし」とは、ほのかな表現のみの能くするところではなくて、かやうに鮮やかな表現においてもほのかな表現とはおのづからちがつた深さをもつことになる。象徴詩を「わかりにくいもの」と決めてかかることは、詩を書く人にも詩を読む人にもとかくありがちなことであるが、それは特殊な象徴詩の誘惑にひつかつたところから來る誤りではないかと思ふ。

さらにもう一つ、萬葉の歌で私の心に浮ぶのがある。それは高市皇子が、天武天皇の長女である十市皇女の他界を悼んでつづられたといふ一首である。

山吹の立ちよそひたる山清水汲みに行かめど道の知らなく

この歌を読みくだしてゐると、薄黄摸様の裝束をした、清らかな姫君の姿が、清らかな調べの奥にはつきりと浮んでくる。一つの立派な象徴歌で、いささかの濁りもない表現にふさはしく、表現の空白が感じさせる美しさもまた深く澄みとほつてゐる。ここで私にとつて問題となることは、いふところの餘韻餘情が深さをもてばもつほど、それは端的に人の心を打つことになつて、マラルメのいふ「すこしづつ仄かながら感じられて行く嬉しさ」とは別物でありはしないかといふことである。